

秋水
泡語

卷
の
九

二
〇
〇
五
年

わたしのつぶやきはまだ続いている。流れに泡が浮かびまた消えるように、雑多な言葉を連ねて綴じたものが九つできた、その流れが澄んで秋の水のようであることを願いながら。

本物の詩人ヴァレリーは言っている

「厳密な韻律法の要求は、わたしたちの魂にとって異質な、いわば、わたしたちの欲望に耳を貸さない耐久物質の持つ特性を自然言語に賦与しようとする技巧なのだ」

「わたしは、ただ、強制的な諧調や韻や定められた形といった恣意的なものの全体が、ひとたび採用され、わたしたち自身に対立するようになると、それは一種独特な哲学的美しさを持つということを考えてほしかったのだ」

「神々は、気前よく、わたしたちにただで最初の句を与えてくれる。だが、この与えられた句と韻を踏み、超自然的な兄ともいふべき第一句にふさわしい第二句を作り上げるのは、

わたしたちの責任なのだ。第二句を天からの贈り物である第一句に匹敵するように仕上げるには、経験や精神のあらゆる手段を尽くしても十分ということはない」——と。

わたしはただ、天からの贈り物を書き取っているようだ。わたしから出たといえるような第二句が、語となって浮かび出る日を求めて、九つの冊子を措くことにしよう。うたかたは海に流れ出て蝶になることを夢見ている……

元朝の故郷雪山近く在り

楼蘭で千数百年の歳月を眠るミイラの夢想を思う
(NHK)

一月四日
仕事始め眩暈して知る老いの坂

一月七日
「狂騷の中で」

目白が白眼で男に言った。

「組織の人事考課は、その組織の利益のための
一面的な尺度に過ぎんよ、

君にはもっと大切なものがあるのじゃないか、
それを見失ってよいのかね。

昔言った人がある、

社稷は棄つ可く、人倫は棄つ可からず——と」。

翼ある者は緑の身をひるがえすと森へ帰った。

一月九日
雪の野や我が注脚を読む車中

一月十三日
かじかんだ背を暖めるメール読む

一月十七日

ユートピア建築冬を普請する

(トラックにその名)

一月十八日

冬の日々この道だけが突き抜ける

身中に灯火の暖星の下

一月二十日

日間の瑣事舞う雪と消えてゆく

一月二十四日

狂躁の猫道よぎり春きざす

一月二十五日

同僚の最終講義わたくしに語られるごと耳傾ける

(倫理学講義)

「器にすくいとられた海の水」

佐藤一斎の美しい比喩「器水」を称えて

あるとき天が

泥をこねて

天日に干して

奇妙な物を創った

天がその器に

海の水を掬ったら

器水は時をつかんで

何事かを為しうようになった

天の下にあるものはしかし

何物も変化をまぬがれない

不思議な器も例外ではない

器はこわれる

水は

土にしみ入り

海に流れ、天に上り

また海に帰る

今では器水が問う

天とは何者か

自分は何者か

考えることができるのは

器水としてある間

一月二十六日

今の世を赤銅の月出でて問う

一月二十七日

チドリは千鳥足でヒトは背進、見えぬ未来に無手勝流で

一月二十九日

霜消えて水母のように月泳ぐ

虚清なる海月天地を浮遊する

一月三十日

麦畑の上で群鳥円舞する

田園に身心放ち春を待つ紅茶の香る磁器を手にして

伊都国の甕棺並ぶ部屋冷える

幾星霜見たか内行花文鏡

二月三日

薄雪が子細に描く山のひだ

二月五日

還曆を前に一縷の「数」を待ち心を決めて書簡を投ず

「敬」保持し時空に生きる者として初春の陽の中に位置どる

自動車を定期点検に出して待つ間にこんなことが頭に浮かぶ。ところが、夕方家内が手紙を用意しているのを見て、封筒に切手を貼るのを忘れていたことに気づく。郵便局に電話をして何とか対処できた。わたしの実体はこのような頓馬な。

二月八日

「太陰曆甲申年十二月三十日雑言」

わたしの言葉は届いたろうか

わたしの願いでもあり、また、

覚悟ともなるべき言葉は。

はるかを目指し進んでいるか

暦と伴に還り来たって

この赤肉と化して

この公案は美事生きるか。

二月十二日

夕方近く、教育テレビで糸操り人形劇をやっているのが目にとまり、「西遊記」の一場面を見た。番組は、日本の人形浄瑠璃と中国の人形劇の交流という趣旨で組み立てられていたようだ。

北京でも垣間見たせい、中国の演劇は親しいものに感じる。音楽の演奏があつて人物は歌で語る。日本の人形浄瑠璃はこの形式から影響を受けたのではなからうか。歌舞伎もくまどりやみえを切るところなど、中国のものとながりがあると思う。戦国末期から織豊期にかけて海外交流が盛んであつた頃に、日本人が中国で見たり、中国の演劇をよく知った人間達が日本に來たりして、その形式が伝わつたものと推測できる。音楽の調子は異なり、舞台背景や衣装は違ふが、形式の多くにつながりがあるのだろう。そういえば、近松に「国戦爺合戦」という人形浄瑠璃がある。鄭成功が活躍したのは十七世紀だ。この頃まで日中の交流はまだ無視できない数の人間たちによつて生き生きしたものだったにちがいない。堺の後を継いだ大阪に、近松の近くに演劇にかかわる具体的な人物が居たのだろう。

傀儡は既に古代に日本に入つて來たし、演劇も神樂の日本古來のものに對し伎樂のような伝來のものがあつて、それらの混交が長い歴史の中で進んだのであろう。仮面劇は伎樂に始まるものかもしれない。その様式性やゆるや

かなりズムの舞踏の型は能につながっているのだろう。現代では「国風」と呼んで日本独特のものと思っている古典演劇も中国演劇との融合の中から形成された、と考えるのが妥当だ。中国の伎楽からして西方の影響は歴然としている。文化は異質なものととの交流の中で変遷する。

ところで、日中の歌劇をヨーロッパの歌劇と比べると、音楽の旋律の違いだけでなく感情における差異を認めざるをえない。日本の演劇は中国のものとも異なる。涙の場面が多くめそめそ・うじうじしたところがあると思う。いじめられて最後に爆発してみえを切るところなどは、やくざ映画から現代のテレビドラマにまで残っている。中国のものは壮大な構えがあつて現実に対する冷徹な眼があるように、その文学から思う。われわれの現実主義には問題があり、もつと違う感情教育によつて強靱ということになじむ必要がある。

傀儡の悟空あやつる糸見えずかの大きいなる手の内にある

多事多難悪戦善戦釈悟空

一つ糸で春の空舞う孫悟空

二月二十日

淡雪が入るごとに澄む池の水

二月二十四日

春とある赤い鳥居の立つ屋敷

二月二十七日

ギャラリーで木の風を聴き土筆食う

(今年出たものの砂糖漬け)

まだ冷えるグランドピアノ置いた縁

座敷縁小瓶に挿したふきのとう

画を掛けた床に一對雛を置きG線上のアリア始まる

(飾り棚の下引き戸の中にCDプレイヤーがあるらしい。

絵は南天の赤が鮮やか。白雲・・・と書いてある・・・)

菜の花に黄色を添える書院窓

(柱にホトトギス同人の句)

三月五日

予報どおり淡雪春と争う日

画の茶器に茶葉添え贈る早春賦

「日常茶飯、赤肉団塊、一無位真人」

公案を解けず還暦祝う春

海浜にキャンプした日は遠く去り巡る春の夜なおよく吟ず

三月六日

「茶漬けを食し春の野を遊行する」

くりくりと音立て上る雪の丘

構図とる梅・雪・椿、視の領野

白髪の狛犬の眼に春の雪

竹揺れて淡雪落ちる一呼吸

ゆるやかなリズム林に雪雫

山の池侘びを極めて雪の春

雪の下野芥百穴に虫起きる

(横穴石室を持つ小古墳群)

三月九日

定年の人送り出す小宴で心構えをわが身にも問う

三月十一日

春の雨霞みに溶けて人包む

三月十三日

雪散つて椿が花卉すばませる

海峡の春の潮に溶ける雪

莊嚴しょうごんし位牌二柱に春の経

余寒して燭台の火はゆらめかず

三月十九日

二世代と腹に一人彼岸道家族旅行で還暦祝う

甲冑を着けず春寒曲輪道

肌寒く古湯古城の峰の風

山城の狭い頂上谷の村古い支配の体制の怪

天山へ人家田畑も無い山に広域農道現代の怪

天山へ水揚げる怪広報し展示館立つ人の営み

春の夜の眠りは浅く夢千鳥

三月二十日

大楠は樹齡二千年春の淀

おみくじを桜の枝に結ぶ娘は身重の体咲く花を待つ

彼岸寒古墳の縁の梨の畑

(元の濠の位置)

後円へ焼いた草踏む無縁塚

(全長百十四、幅六十余メートル)

陪塚は菜の花の中長き時

揺れる地に電信迷う古代の地

(福岡沖地震)

三月二十六日

本堂へ朱傘従え僧正は春の陽射しの石段上る

賽銭を上げず春陽の射す中へ

春風に鸚鵡の声を聞く多聞 (道中、オウムが「おはよう」と言った)

杉の実を落とし千年立つ樹林

芭蕉の句碑に「此の松の実生せし代や神の秋」

六十の春の門出や鹿島立つ

利根川の水を田に引く彼岸過ぎ

三月二十七日

聖堂の門閉ざす朝余寒する

ゆりの木の咲き初める奥半跏佛

(本当は中宮寺菩薩像)

三月三十一日

花一つ開き世界を改める

八年を隔てて朋と会う春を上野の山で四方山話

四月一日

春重ね初心の老いにたじろぐ日

超越を求め世界の春に入る

雷神が去つて陽の照る赤芽籾

四月四日

法王の遺骸の前に世界から来た人々が列なす時代

四月九日

花尋ね清正公の客となる

椿咲く上の曲線武者返し

鎮台へ宛てた西郷大将の書簡に既に形勢にじむ

四月十日

一心行の大桜を見物。

天正の墓失せ残る老桜

一心に行じた族の裔も絶えただ世々を見て大桜立つ

四月十六日

小蝶をはねて深まる春を知る

ゆずり葉の仕事たけなわ春熟す

四月二十二日

弔いへ都市高速を早駆けるあわてることもないこの道を

筑紫野の天拝山に野辺送り不運な数の人を悲しみ

春の堂供花一ひら散る刹那

紅顔が白骨となる紫野

楠若葉陽光燦々棺出づる

四月二十四日

蜜蜂の羽音が満ちる部屋で読む

水底が揺れ住民の退去した島影かすみ海原の中

五月三日

光満つ五月の空に一筋の悟空の飛跡西域目指す

筋斗雲散らし若葉をゆらす風

五月五日

事も無し王墓の上に鳴くひばり

ビニールの下でいちごに染まる指

揺れる地に棲まうはまぐり志摩の海

二見が浦胎児を含む三代の親子がそろい霞む海見る

対岸の大観覧車目指す旅器水は陸へ遊行果たす

海蝶の夢から醒めて山の庵

五月十三日

瞳孔を全開させて向かい合う五月の光あふれる世界

眼底に世界受け入れ風に立つ

世界見る眼光衰微空木咲く

眼の襷を身に引き受けて老いる春

五月十四日

一難を身に引き受けて自祭文書いた淵明はるかに偲ぶ

五月十五日

臨月の娘と歩く丘の道夕陽を浴びて卯の花が散る

やわらかな光の丘にささやかな事を印して時空を歩む

五月二十三日

「日間の瑣事に埋もれて」

今日はいやな男に会ったので、露台で空を見上げた、
春の月は円満で、風を送ってわたしの頬をなでた、
心がすーっと清められて、眼が見えるようになった、
そうして、月を仰ぐ種族が甦った。

エピファニーを捉えたかしら、

地震で壊れた家の瓦が修理されて、棟がまっすぐになり、アンテナは首をかしげて、月の声を聴いている、わたしの受信機にもマイクロウェイヴが届けられ、そのメッセージを体に広げろ。

五月二十六日

跛行してさつきの下を白き猫

老い猫の眼の鋭さや田植え時

五月二十七日

沸き上がる初夏の嬌声エクササイズ

綱引きの声に驚く武者幟

五月三十一日

「散文による讃歌」

初孫抱いて

あいさつ交わす

「やあ、よく来たね」

「ええ、来ましたよ」
世界が微笑む

六月五日

NHK日曜美術館で、彫刻家本郷新の作品と人を見る。つづいて、写真家白川義員が世界の百の瀧を追ったドキュメンタリーを見る。

映像で人と自然の創る美に心洗われ新生児待つ

六月十日

一人の顔がたしかに生長す、生まれて十日「隼」^{いちにん}という名で

六月十一日

水紋を染めて水田に写る傘

「詩の状態は共鳴状態である……」ヴァレリー

六月十六日

大八洲すつぽり梅雨の霧の中

新生児抱えて歩む五里霧中

六月十九日

さざ波が朝日に歌う夏の島

花畑の向こうに志賀の夏の海

カンナ咲く下に釣り舟点在す

六月二十三日

木ねずみの子守唄聴く夏の月

月照らす時空をめぐる夏の夢

仲基と念仏者をつなぐ想網目をめぐり諧調醸す

一筆啓上、東京は雨が降っているようですが、福岡は梅雨に入っても雨がなく、木々の緑が鮮明ではありません。孫が生まれていよいよ年齢を感じさせられます。朝早く目が覚めるようになって夢見心地で日を過ごしているのでしょいか、興にのって次のような戯文ができました。

「富永仲基余話、または大日比三師異聞」

朝どういふきつかけからか「仲基」という名が頭に浮かんで、その人のことと判っているのに、姓を思い出せないというもどかしい思いをした。大学に出てインターネットに繋ごうとしたところで、脳の回路が「富永」という姓にたどり着いた。しかしついでだから、人間が身体の外に形成した電脳網を覗いてみた。『出定後語』と『翁の文』を採録している岩波書店の古本二冊を注文し、さらにいくつか興味深いサイトを開いていたら、内藤湖南が大阪毎日新聞の一万五千号記念の講演会で話した講演録が見つかった。A4用紙で十六ページある。さっそくプリンターで印刷した。加藤周一の紹介文で知っていた以上のことが書いてある。「加上」、「異部名字難必和会」や「三物五類立言之紀」など、富永仲基の独創が要領よく解説してあった。論理的、科学的に考えたという点で日本中にこの位の人はいない、大天才である――、と内藤湖南が称えている。

歴史家内藤湖南という人については、古田武彦の古代史の議論で内藤説が批判されていることくらいしか知らなかったが、この講演を読めば、見識を持った学者であったことが判る。この大阪を祝う面をもっていた講演会で、「大都市主義には反対です。：・大阪讃美のために出て参ったものではありませんぬ」と刺激的なことを言っている。一九二五年のこういう会合で、神道、儒教、仏教を批判的に考察した富永仲基を取り上げるといふことからして、すこし勇氣の要ること

であつたろう。この内藤湖南のような人こそが、富永仲基を再発見したのだ。

文中、富永仲基の仏教經典史批判を仏教への批判ととった仏僧側からの激しい攻撃があつたことが述べてある。その中に、「浄土宗の坊さんが書いた『大日比三師講説集』といふ本がありまして……とあるのが目にとまつた。『大日比』というのは、ひよつとしたら母の生まれた土地の名ではないか。『三師』というのは、母から聞いたことのある三上人と符合する。しかし、重度のアルツハイマー症の母には尋ねようがない。……」

さて、日が改まつても、わたしの脳に「大日比三師」という言葉が留まつている。もう一度、電脳網に頼つてみた。あつた、十一のサイトが出てきた。その中には、わが郷里の長門市観光案内まで含まれている。やはり、大日比の浄土宗の寺、西円寺の法岸・法洲・法道の三上人のことであつた。『近世の念仏聖・大日比三師の福祉思想』といった何冊かの本や、『大日比三師講演集』という刊記のない古書（これが内藤湖南のあげた本だろうか）などがあるらしい。母の話以外では聞いたことがなかったが、「講説集」があつて内藤湖南の目にとまるくらいだから、当時まで広く名僧の名が高かつたのだろう。富永仲基の議論はけっこう知られていて、西国のいなかの念仏聖も無関心ではおれず、信仰から素朴な反応をしたものだろう。

法岸は、毎月五日に「小兒念仏会」を開いて子供達に法話・童話を聴かせ、仏前に供えた菓子を与え、念仏を唱えさせた。一七七九年以来現代まで続いている。それが世界最初の日曜学校だと、西円寺を訪れたロンドン大学教授が認めた――ということが、長門市観光案内に書いてある。そういえば、その記念碑が西円寺に立っていたのを思い出した。大日比の仏事は西円寺で行なわれ、参会者全員が称名念仏してその響きが心地よいほどであるについては、そういう念仏聖がいたという歴史があったのだ。藩政時代の旧郡一帯に熱心な真宗門徒が多いのも、副次的作用があったのかもしれない。

インターネット上には「藤永文庫」というのもあった。美祢市立図書館に藤永和上の蔵書を収めたものと書いてある。藤永和上の名は、熱心な真宗門徒であった両親の話に出ていた。亡くなったものか。残念ながら、母にその名を聞かせても反応がないだろう。「藤永文庫」には、『大日比三師伝』という書名が出ている。明治四十五年、西円寺出版とある。大日比は小さな漁村だが、その頃、このような本を出版する勢いがあったのだ。長門市観光案内には、西円寺に和漢の書物二万冊があると記してある。帰去来兮の辞を書いたら、西円寺や美祢市立図書館の本を見に行かねばなるまい。

真宗僧の和上といえ、わたしの両親は、もう高齢であった伊藤義賢和上という人を尊敬していて、我が家に招いて同志の人たちと法話を聞いていた。文学博

士の学者で、厳格な親鸞主義者であったと思われる。わたしが神社に行っても参拝をしないのは、子供の頃からのその影響である。伊藤和上は、たしか『大乘非仏説論批判』という本を著していて、郷里の我が家にあるはずだ。經典批判から大乘非仏説論に至った富永仲基と対決していたのだ。

觀光案内の西円寺の項は、童謡詩人金子みすずの伯母は大日比の前田家に嫁いでおり、たびたび遊びに行きその念仏の影響は大きかっただろう、と書いている。母が、金子みすずと歳がだいぶ離れているのに、みすずのことやその家のことを話していたのは本当だったのだ。度忘れをきっかけに、金子みすずの詩に仏教的な思想が流れている、その一要因にまでたどり着いた。そして、郷里や家族を通してわたしの中にもその流れがあることに思い至る。一方で理性的な論理は、大乘非仏説論を指し示す。わたしは、原始仏教經典のブッダのことばに智慧が満ちていると思う。また、富永仲基の知性に感服する。仲基という日本に稀有な天才を媒介として、わたしの夢想は、シナプスの繋ぐニューロンからインターネットを経巡って漂い、一つの環を閉じた。

六月二十七日

螳螂の子を南天に解き放つ

梅雨旱天から数多赤とんぼ

音信が旱潤す一しづく

六月二十九日

六月の田をゆるやかに白日傘

七月二日

石上に水注ぐ雨や梅実る

睡蓮を打つ雨音を聞く金魚

七月三日

雨に濡れて梔子の花切り落とす

七月四日

人送る夕べや白き夏の菊

七月十三日

野鳩鳴く、くぐもる声で雨の歌

雨安居に赤子と会話交わす日々

七月十四日

精神を転じて気づく蟬の関

七月十六日

睡蓮の讃歌する朝梅雨明ける

七月二十一日

炎天に溶けて回らぬ観覧車

太閤の利発さ思い目の前の右往左往をひややかに見る

夏の月仰ぎ無言の願い抱く

七月二十三日

語らうに孫かき抱く夏の宵

七月二十五日

炎天下赤い郵便集配車熱い冷たい手紙を運ぶ

七月二十六日

ラグビーのゴール人待つ油照り

蝉囃す人の世行方定まらず

片蔭を帽子目深に修行僧

七月二十八日

夏の夢異邦の町の坂上がる

青芝のかなた尖塔夏かすむ

七月三十一日

自らを世界にあずけ安らかに眠る嬰兒の笑顔に見入る

八月一日

稲光り花火と競う都市遠く

百連の花火の後のしじま見る

八月二日

太閤の末期のように独裁者人を巻き込み迷走やめず

(狂歌)

八月六日

腰降ろし芝刈る汗に海の風

八月十六日

夏の果て熱にかげろう山を見る

八月十八日

「世はなべて……」残暑見舞いに返事書く

賢人が嘆いた同じ世は秋へ

田園に露踏む人の詩に習う

八月十九日

仰ぎ見る灰青色の海に月雲を流して秋運ぶ風

(十五夜)

事一つ成つて秋へと進む時

八月二十日

秋風に止観の時を告げる鐘

朝、ヨーアヒムの死のところを読む。

八月二十二日

めくるめく小説を読む人生のために人生味わいながら

人生の舞台で出会う群像の人と距離とを測る眼を得る

八月二十三日

「秋水泡語」

ようよう秋色を湛えはじめた谷川の、
水を見つめて樵夫が一人言うよう、

ワキ「赤子が手足をしきりに動かして、

語りかけようとする顔の何とけなげな、

口元にかすかな微笑を含んで、

天井を見る眼のものをめずらしげなこと、

寝顔の閉じた眼と口の線は、

仏教壁画の童子のような……」

どこからともなくしわがれた声で、

シテ「そのように見えるのも、多くの作家が

透徹して描いてみせたように、

愛着からくるひいき目にすぎんよ」

ワキ「ええ、そうですね。

しかしここに人生の味わいがあるのです。

どこかもつと違うところに深い意味を探すのは

たぶん空しい所行です」

シテ「君も孫を持つ歳になって、少しは

智慧がついたようだ。

愚者はそういう虚しいことで、

時を満たそうとする。しかし……」

ワキ「しかしそれは無でしょうか。

優れた作家達の描いた充実した時は、

空しい微小な時の集まりと違うものでしょうか」

シテ「うーん、しかし……」

あたりには秋の水の音だけが続いていた。

九月三日

東西の台風力競い合う

九月五日

亡き友も出る夢を見て目覚めればその粗筋も闇に消え去る

九月七日

モンテスキューの智慧置き去りに総選挙せめて批判の一票投ず

九月十日

陶詩読む機中の夢に浮かぶ菊

抗しつつ一つの人生受け入れる詩の味わいを知る歳となる

九月十一日

パルテノン破風を見上げて乾く喉

サラミス島かすみ夏草枯れる丘

まだ夏の陽射し女神が並び立つ

オデュッセイの海を一飛び夏の果て

九月十三日

小アジア臨む浜辺で水すくう

エウロペが肌干す島の昼下がりに

九月十四日

英雄の征途の海に乾く島

聖人の島へいざなう飛ぶイルカ

聖人が簞もった堂で涼をとる

紺碧の海に白帆が立つ入り江

九月十六日

多人種で夜半に及ぶバンケット音曲高く月明らかに

トルコ風衣装で踊るギリシア人長い歴史を想起させる夜

九月十六日

ミニトレイン、アスクレピオンへの坂上るエーゲの青き海を見下ろし

秋来を告げて夕立コスの島

九月十七日

時知るかオリーブの上飛ぶ鳩はギリシア・ローマのアゴラを見つめ

半壊の像の背後の丘の上アクロポリスに夕暮れ迫る

数々の陶器が語る人間は祖先の生を再び生きる

ドーリアの柱の列に射す夕陽蔭の一つのベンチにかける

新しい列柱の中並ぶ像頭を欠いてさまよう夢よ

守護神の社殿も時に抗しえず

九月十九日

朝食を取りつつ眺めパルテノン神殿の影脳裏に刻む

バイロンの胸像展示する部屋でギリシアの長い歴史を偲ぶ

三千五百年の歴史をめぐって感興は尽きない。

名月を昨日アテネで今日ここで

九月三十日

急ぐ世に古人に学ぶ九月尽

十月四日

田が二枚すでに刈られる、古い検査

(採血検査)

十月六日

コスモスは花保ちつつ夜気の中

十月九日

時の鎌に追いたてられて秋の道

十月十一日

重陽の空に神舟人乗せる

十月十二日

藁を焼く煙に移りゆく季節

秋桜とりどりの色徒兄逝く

十月十三日

「独裁者殺せ」と落首、大学と名乗る組織で抑圧進む

ファシズムの狂気の中で一休の狂気を偲び精神保つ

十月十五日

急がずにすむ道急ぎ花野行く

秋バラのとげに刺された指さする

コスモスを蔵して光るすすき原

秋の陽に時とまどろみ川行かず

十月十七日

少年が踵光らす秋の暮れ

十月二十日

円満に月と語らう日を求め疲労を運ぶ秋の夕暮れ

清気満つわだちで落ち葉踏む朝

干し花のかそけき秋の昼下がりに

老いの眼に秋寂の灯が六つ七つ

言葉なく念じ跣坐する身に夜寒

十月二十二日

五百人強制されて「講演」へ落語の「寝床」再現する愚

プラタナス一葉落ちるエウロペの自由の海辺遠く離れて

十月二十二日

残月にムベの実一つ捧げる木

大き鶏広い苅田の籠の中

「澄明秋天仰残月」

種というものはそれぞれ独自の生を生き、それぞれ異なつた死に方をするものだ。

月を仰ぐ種族もまた、それぞれ困難な生を生き、人とはちがう死に方をするものだ。

人の族の在りようを突き抜けた種になろうとするから、死に方も自覺的なものなのだ。

月を仰ぐ種族は一つの個体が一つの種だ、個体ごとの生と死がある、

その死と、まして生は同じでありようがない。

ただその型に、いわゆる精神に、

それと見分けられる筋目が貫いているだけだ。

彼らを月を仰ぐ種族とするのは、

同じもののない木目や玉の理の美しさだ。

コスモスの中のコスモス孫と在る

十月三十日

十一月一日

充血した眼で秋風を凝視する

内閣の改造映すテレヴィジョンはやり目もらい涙にうるむ

十一月二日

眼を病んで眼を閉じて待つ開明を

十一月九日

先日採血で貧血を起こして中断された胃検診を受けに行った。胃、大腸も、前立腺、肝炎その他の血中物質の検査も異常なし。その後〇〇医師が、このあいだのことであって、「脳のCT検査をしてみませんか、五千円かかりますが」と勧めた。そこでCT検査をしてもらったら予想外の事態となった。皮肉な成り行きを娘と孫にメールで伝えた。「胃の検診に行つて脳の腫瘍を見つけてもらったよ・・・」。

頭蓋骨の中に腫瘍を抱えているというのは気持ちのよいものではないが、生き物が生きるということはこのような現象だ。わたしが生き物であるということを、CTスキャンの写真映像を見ながら実感した。脳にそれと分からないざわめきがあり、血液がそのゆらめきを含んでいるように、しかしいつも通り巡る。人はいつも今の生きかたを試される。

髄膜腫白い小さな鏡置きわたしの脳に観照命ず

人生の切斷の時近づくとも明らかに知る還暦の秋

無情物紅葉の山は色を織る

十一月十一日

行く時や時雨に濡れる百舌鳴かず

眺望し孤高を守り黙す百舌

十一月十二日

南山の錦を仰ぎ花起こす

行く秋や禿頭叩き耳澄ます

十一月十五日

星一つ従え月の冬支度

十一月十六日

柿赤し冬の時代に冬巡る

「共鳴」

東の空がわたしを照らす
印のある者に呼びかける
時雨を諭して雲間を開き
円かな光にわたしを浸す
無音の諧調が創り出され
光のきざしを昇り行く

十一月十八日

□大病院へMRI装置による検査を受けに行く。初めて狭い中に入るのだが、目をつぶっていたら三十分足らずの時間はすぐに過ぎた。

対称面に垂直な水平平面と鉛直平面の二断面の何枚もの映像を見ながら説明を受ける。放射線科からの特別新しい指摘はなかったらしい。二断面の写真は、腫瘍が上下方向にも同じぐらい広がって凸凹な球状であることを示している。MRI写真もCT写真が頭蓋骨と同じ明度で石灰化傾向を教えた大きさとあまり違いはない。3cmぐらいだ。素人目には、外側への浸潤は強くないように見える。＊＊教授は、鉛直断面図で内側に一部浸潤があるかもしれないと言っている。腫瘍の上側に大きな血管が写っている。＊＊教授の診断は、髄膜腫だろう、それは良性である、六十歳という年齢でどういう対応をするかはむづかしい。頭頂部なら切除するところだ。生活の質をどう考えるか、不安に思いかそうでな

いか、結局患者の考え方の問題である。対応はもう少ししようすを見てからにしてはどうか
—— というようなことだ。わたしもその助言に従うことにした。時間のとりやすい来年三月末に予約をした。

源頼朝はさいづち頭であったというが、わたしの頭蓋骨も上から見て後頭部が広がり、正面から上下に見ても耳の上から外側へ広がっている。そのことは触って分かることだが、重大なことを告げられながら、目の前の何枚ものそれらの写真を眺めていた。

わが脳を核磁気共鳴智慧試す

揺すられて桜紅葉の散る葉見る

髄膜腫抱いて幾冬越え行くか

十一月二十一日 わたくしを容れて輝く小春の日

十一月二十二日 ひこばえが冬に抗して若緑

十一月二十三日

夜、『本』連載の「『眼蔵』をよむ」第三十一回、宮川法師の「佛性巻」読解を読む。「…種子および花果、ともに条々の赤心なりと参究すべし、…内外の論にあらず、古今の時に不空なり…。根茎枝葉、みな同生し同死し、同悉有なる佛性なるべし」。

百の歳、腫瘍持つ身のこの小春

「条々の赤心」、熟す柿を喰う

十二月一日

はやぶさが三億kmの彼方から音信寄せて気宇を広げる

「はやぶさの使い」

隼よ、ここは

天の河銀河の

太陽系第三惑星

わたしたちが地球と呼ぶところだ。

君は、この

自らは光らない

それゆえに生命を宿すことのできる

小さな星に生まれたのだ。

これらのものすべてを含む

世界というものを見るために

君はここに來たのだ。

十二月六日

冬茶事へ妻送り出し食う朝餉

しぐれる朝後ろに迫る救急車

十二月七日

山茶花に予感授かり門を出る

大雪に葛藤の葉はまだ茂る

十二月十一日

添える語を探す賀状という儀礼

賀状書く手を止めて見る北の海

玄海へ櫛の葉と入る冬の水

十二月十三日
年年を巡るしかけへ坂下る

雲覆う天蓋の下寒氣満つ丘に佇む天と地と人

十二月十四日
大根をおろす今年も尽きる頃

海鼠食う類人猿の裔の者

十二月十六日
南山が薄雪冠り西山が薄雪冠る

十二月十七日
しくじりにはらわた煮える大寒波

十二月十八日
一筋の鎖にまとい立つつらら

禿頭の身で薄氷を踏んでみる

(子供のように)

繁華街女法師の立つ師走

十二月二十二日

失われた時が夢見に冬至の夜

「われわれは夢と同じものでできている。

そしてわれわれの短い一生は、

眠りとともにおわる」・・・W・シェイクスピア

十二月二十八日

「仕事納めの日に」

足早な演技者好む世にあつて納め得ぬまま仕事に励む

『デカメロン』読む間をつくる今日もまた三万日の物語編む

十二月三十一日

波音に午睡から覚め海蝶は渚を高く沙鷗へんげに変化

あれこれの首尾と不首尾と年が行く

おおつごもり一団の鳶遠望す

二〇〇六年 正月
徐山亭 謹製



『言志四録』

佐藤一斎

志気は鋭ならんことを欲し、
操履は端ならんことを欲し、
品望は高ならんことを欲し、
識量は豁ならんことを欲し、
造詣は深ならんことを欲し、
見解は実ならんことを欲す。

海水を器に斟み、
器水を海に翻せば、
死生は直ちに眼前に在り。

陸象山

「六経は皆我れの注脚、
六経は我れを注し、
我れは六経を注す」

奥書

思い立って一冊本に編集するために、閑暇を探しあぐねながら眼光の弱った眼でパーソナル・コンピュータと向かい合った。主観的な思い入れに阻まれてなお拙いものを残しているが、早春も過ぎ去ろうとしているから、作業を終えることにする。

どのような書物であれ、いったん作者の手を離れたものは一人旅立つのである。少しの間でも持ちこたえうるほど品質を含んでいることを願いながら送り出すことにしよう。

二〇〇六年三月

合冊にする前の詠み人の名、市井一人

